

連作小説 1

米袋が明日を開く

瀬尾まいこ

「米袋ジャンプになっただけど、いいよね」体育祭を目前に、無気力な日々を送る高校三年生の葉山の日々を変えたのは、同じクラスの女子・上村の一言だった……。

少しずつ時間を重ねるうちに、なんとなく忘れられそうな気がする。そのくせもう大丈夫だと奮い立とうとすると、またあの日々が驚くくらい鮮明によりみがえってくる。

別れは生きていく上で逃れられない。そんなことはあちこちの歌でドラマで映画で映し出されていて、百も承知だ。でも、自分の意志に反して起こる別れを、自力で消化しなくてはいけないなんて無謀だ。

完全に晴れた真つ青な空には、弱々しい雲が浮かんでいる。教室の中では、体育祭の種目決めが行われていた。玉入れだの綱引きだのリレーだの、誰がどれに出るか、平和な戦いが繰りひろげられている。じゃんけんに言い争いに笑い声。教室はひたすら騒がしい。この世のどこかでは、今も誰かが悲しみに打ちひしがれている。だけど、そんなことで体育祭が中止になるわけがない。どんなつらいことが起きても、ばかばかしい日常は着々とこなされるのだ。

「あのさ」

ぼんやりと窓の外を見ていた俺の頭の上で、すきっとした声が出た。

「たそがれてるところ、ちょっと悪いんだけど」

声のほうに目をやると、上村が目の前に立っていた。

「確認だけしていいかな？」

「ああ、何？」

「葉山君、何も言わないから米袋ジャンプになったけど、いいよね？」

「コメブクロジャンプ？」

普段聞かない言葉の響きに、俺は間抜けに繰り返した。

「去年もあつただけど覚えてない？ ミラクルリレーあるでしょう。その第三走者ってこと」

去年の体育祭はぼんやりと玉入れに出て、適当に玉を放り投げて過ごしていた。他の種目になんて目もくれていなかった。そもそもミラクルリレーだの、コメブクロジャンプだの、ネーミングからしてめでたすぎる。

「米袋の中に入ってジャンプしながら五十メートル進んで、次に襷たすきをつなげたらいいだけだから。他の種目は出る人決まっちゃったし。いいよね？」

五十メートルも米袋の中に入って跳び上がるなんて、拷問だ。本当なら綱引きとか玉入れとか、みんなにまぎれているうちに終わる種目がいい。だけど、もう主張する場はないようだ。俺は静かにうなずいた。

「OK、決まったよ」

上村が言うと、黒板に書かれた米袋ジャンプの文字の下に俺の名前が加えられた。